亡夫の百ケ日忌に際して

遺志を胸に必死に生きています

四山　田中マサ子

冬とはいえ暖い陽射しが続いておりますが、組合員・主婦会員の皆様には、連日ご活躍の事と存じます。

さて私事亡夫工儀の逝去につきましては、三池労組、主婦会政治局はじめ大地評・荒地評関係、また大阪総評、社会党、及び友人知人の皆々様に大変なるお世話相かけ、御芳志・御厚情を賜りまして、御礼の言葉もなく、ただただ感謝致して居ります。

昨年十月十六日、主人の病状悪化の知らせをうけて、取るものもとりあえず回復を念じながら、組合長共々上阪致しました。

病院にかけつけ、大阪総評オルグの宮崎さん（四山出身）、山本さん（三川出身）の悲痛なお顔を拝見して、はじめて夫の死を知り夢かとばかり驚きました。

今の今まで想像だにしなかった出来事に只呆然となり、涙も浮んでこない有様でした。病院の待合室で、どんなに考えてもあんなにも元気で、「三カ月間だ。一生懸命頑張って羊かんを売ってくるから」、と笑顔で出発して行った主人が、まさか私達家族の上阪すら待てないでこの世を去っていってしまうなどということは、夢にも思いませんでした。

「そんなことがあるもんか。工が死ぬなんて。あんなにも元気で、自分の事ばかり心配していたくらいなのに。早く会わせて……」と、さすがに取り乱して泣き叫んだ母。

ほんの二週間の間に、こんな変り果てた姿になって遺体安置所に居ようなどとはどうしても信じられず、家族四人どうしてよいかわかりませんでした。

発病以来入院等親身も及ばぬお世話と、手厚い看病をして下さった大阪総評の宮崎さんはじめ、事務局の皆様がどんなに心を痛められたかと思いますと、只々申訳けなさ、すまなさでいっぱいでした。

向かって左から、未亡人のマサ子さん、長男の康裕君、長女の扶美さん、実母のチヲさん。

主人は結婚以来、労働運動一筋に歩いて参りましたが、今度の大阪でのCOオルグが主人にとって最後の、そして命をかけての仕事になってしまったものでございました。命を守る闘いの半ばにして倒れた事が、労働運動に生き甲斐を感じて居た人だけに、どんなにか心残りだった事でしょう。

三池労組は亡き主人に対して最高のもてなしである〝準組合葬〟を営み、主人の功にむくいて下さいましたが、主人は必ずやあの世で残念がっている事と思います。

思えば、あの忌わしい三川鉱大爆発は四百五十八名の仲間の命を奪い、八百名以上のCO患者をつくり出したのでしたが、あの大事故さえなかったならば夫の命もうしなわれずにすんだのでは……と悔まれ、三井独占資本に対し改めて憤りを感じないではおられません。

一家の支柱がうしなわれた家庭の淋しさ。それを今ひしひしと感じさせられていますが、今までは、各遺族の方々の悩みや苦しみ等も、ただ言葉を聞くだけだといった程度にとどまっていた自分のおろかさが恥かしく自分自身がその立場に立たされてからはじめて思い知らされたものです。

私とて、夫共々一人の炭鉱労働者の妻として、正しく生きるために、まっすぐに道を歩くために、皆様のご指導を受けながら、おろかながらも三池の戦列に加わって参りました。毎日主人の遺影をながめておりますと三池闘争の事、三川鉱大爆発の事、宮浦闘争の事などで、ちょうど走馬灯の如くよびがえって来て、悲しませてくれます。

今は厳しい現実の中で、老母と二人の子どもと共に、亡夫の遺志を胸にきざみ込み、必死になって生き続けています。またその事こそが、皆々様の御厚情にむくいる道と存じ、現在は〝三池生協〟にお世話になりながら頑張っているところです。

月日のたつのは早いもので、おかげで立派に〝百ケ日忌〟もすます事ができました。三池労組・主婦会、及び大阪総評や各労組の皆々様に、ここに改めてお礼を申し上げるしだいでございます。

今後はさらにいっそうお世話をかけ、皆様の足手まといとなる事と存じますが、まげて御指導御鞭撻下さいますように、くれぐれもお願い申し上げます。

遅くなりましたが、亡夫の百ケ日忌を機に、心からお礼を申し上げるしだいです。

×

田中さんのお住居は「大牟田市四山町五八番地」で、遺族には筆者のほかに実母のチヲさん（68才）、長女の扶美さん（17才）、長男の康裕君（14才）があります。

〝組織〟というもの

新聞〝主婦会三川〟から　一

一主婦

さっきから想いにふけっていた夫が、「会社をやめようかなア」――とポツリと一言。

私の胸はドキッとした。半信半疑の私に、夫はいった――「炭鉱マンがつぐづぐいやになった」。

それもそうだろう。日常の会社の中で、いつも話になるのが会社の保安軽視、労働強化、差別……である。

「体さえ健康であれば、家族四人食うに事欠くことはない。現に誰でも生活しているではないか」――夫は、ひとりごとのようにつぶやいている。

私の頭の中では、三池主婦会運動十八年間の、苦しくてもスクラム組んでお互いに助け合ってきた想い出がうかんだ。

夫が本当に会社をやめるとしたら、私は内職でなく働かなければならないだろう。それはいいとしても、三池労組のような組合のあるところがあるだろうか。心細い。

夫を信じよう。時間がたてば、必ずや考え直してくれることだろう。いや、もう考え直しているかも知れない。

案のじょう、翌朝はすっかり晴々とした顔で夫はいった。

「やっぱり三井に奉仕してやろう。三池が去りがたいからね」

「あら、ほんと。それで悔いはないの。貴方が乳恋しさに国鉄をやめて帰ったりするから、炭鉱なんかで苦しまんなんとよ」

「俺が国鉄をやめていなければ、お前とは一緒になんかなっていなかっただろう。そしたら、もっと美人と一緒になっていたかもしれん。一生の不作じゃったなア…」

「あら、私も一生の不作と思っていたのに」

「まアいいさ。かあさん、また頑張っていくぞ」

やっぱり、組織というものはありがたいものである。

三池の火をさらに大きくし、いっそう誇りある主婦会活動を築きあげるために頑張らなくちゃ。

×

これは「労働者とその妻」という題で、〝一主婦〟からの投稿として、新聞〝主婦会三川〟にのっていたものです。

考えさせられた事

キスマークは色気ンあるねエ

一主婦

先日、高三の長女と風呂へ行っての事。体を流していましたら、私の足が黒ずんでいるのを見て――

娘「おかあさん、どがんしたつね？」

私「自転車ばぶっつけたつじゃろか。それともキスマーク？」

娘「ばアか。でもキスマークは、そがん色とは違うよ」

ワー、ショック。私は、キスマークつけたこともないつもりだけど……。

私「色が違うって。そんならキスマークば見たこつのあるね」

娘「あるよ。そんなもん。クラスの人が、ボーイフレンドからキスマークつけられて、得意気になって、すまーしとらすとじゃけん。気が知れんよ。あれは、かくれるところに、ホンワカとつけられたところに色気ンあるね」

また、ショック。

数日後急用ができて仕事を休み掃除をしながらテレビを見ていたところが、アメリカ映画の「フレンズ」を、部分的に紹介しているのを見てびっくりしました。十五才の男の子と十四才の女の子が知り合い、そして同棲―出産と、その時その時の場面がこくめいに映し出されるのにまたショック。

夜仲良しの奥さんが遊びにこられたので、その話をしましたところが、中二の娘

「フレンズなら私も知っている。学校で話題になっているから」

とし頃の子供をもつ親として、考えさせられた一日でした。

（新聞〝主婦会三川〟から）

変見

冬の夜は長い。主人と子供達の寝静まった十一時過ぎ、テレビを見るでもなく本をひろげるでもなく、一人ぼんやりとコタツに入りながら、時として親と子のつながりなどについて考えて見る。

昭和八年生れの私は、美人薄命の逆をいっているから、かりに七十年の長寿を保てるにしても、あと三十年余り。その間十二～三年もすれば、子供達は成長して新しい家庭を営み、自分に生れてくる子供との新しい歴史が始まるに違いない。

とすれば、私と子供との純粋に密着した関係は、自分の生涯のうちで二十数年でしかない。しかも、もうすでにその大半の歳月は費してしまっているのだ。

長女に次いで、長男が生れたのが昭和三十四年八月。かの峻烈を極めた三池争議の前しょう戦ともいうべき、会社が第二次合理化の準備工作として、賃金の分割払いを提案してきた頃のことであった。

日頃低賃金の中での生活では十分な出産用意とできるはずもなく、それでも予定日にはちゃんと元気のよい産ぶ声をあげて生れてきた長男だった。しかも、この長男の誕生は、同時に私の組合意識の誕生でもあったのだ。

以来、厳しいたたかいと、苦しい生活の中で、長男は年一年と成長し、もうこの四月には中学一年生の春を迎えようとしている。

子らへ語り継ぐ平和と戦争のこと

七夕分会　中原千春

勉強のできない点では私達夫婦を悩ませもするけれど、この頃ではいろんな事に興味を持つようになり、とくにテレビを見ながらの質問は、戦争、沖縄、公害等々際限なく続き、不勉強の私をどしどしつついてくる。

たとえ沖縄返還が決まっても、この長男の誕生は、同時に資本主義社会では、経済の高度成長に伴う過剰生産は、必然的に戦争への道程をたどる危険性をはらんでいることなど、そんな長男に向かって今度は私が先生になって学習会の受け売りをするのである。

物価は高くなるばかり。福祉手放しで喜べないのは、一部を除いて、アメリカ軍の基地がそっくりそのまま残ることになっており、それがまた今後にどんなに大きな問題を残していくことになるのか、だれもがそれを恐れるからなのだ。

中原さん

資本主義社会では、経済の高度成長に伴う過剰生産は、必然的に戦争への道程をたどる危険性をはらんでいることなど、そんな長男に向かって今度は私が先生になって学習会の受け売りをするのである。

物価は高くなるばかり。福祉は低くおさえられ、およそ私達の願いとは反対の住みにくい世の中が続く。でも、人間にとって〝生きる〟ということこそが第一義的なものである以上、少しでもそれをよりよくするため親子共々多くの労苦と努力を重ねなければならないのだ。

心から平和を愛せる人間になること、個人の幸せがみんなの幸せと決して矛盾してはいけないことなど、親としてこの子らに語るべき課題は多く、また責任は重い。

私達が正しいと信じて進めてきた運動の足跡が、せめてこの子供達の人生の何ほどかの指針になってくれれば……と思う私である。

×

この欄に、積極的なご投稿を。　編集部